



La troménie de Bretagne : Légendes et réalité d'aujourd'hui

新谷尚紀

- ① はじめに－民俗学の海外調査研究－
- ② ブルターニュのトロメニ
- ③ ランドロウのトロメニ
- ④ グエヌウのトロメニ
- ⑤ ロクロナンのトロメニ
- ⑥ トロメニの構成と特徴
- ⑦ おわりに－伝承をめぐる力学－



トロメニtroménieはブルターニュ地方の聖人信仰と結びついた伝統行事である。アイルランドやウェールズからやってきた聖人が、領主から一日に歩くことができた範囲の土地を与えようと言わされて歩いた順路を、毎年あるいは6年に1回、聖遺骨relicuesを担いで行列を組み、十字架croixやバニエールbannièresとともに行進processionして一巡する。トロメニの語源は、ブルトン語のtro minihi、もしくはtro mene、つまり、minihi（修道院の開い地）もしくはmene（山）のtro（一巡）と考えられ、tro（一巡）、tour（一周）がterritoire（領域）の設定に通じるところから、troménieとterritoireとの緊密性が浮かび上がる。そして、聖人の行跡の追体験としての儀礼的繰り返しが、領域設定の再現を演出しており、儀礼による「原初回帰」の機能が発動し、歴史の硬い時間から民俗の柔らかい時間への移行が参加者の信仰衝動を刺激する。とくに、順路途中のスタシオンstationsの設営や人々の信仰儀礼的所作には、キリスト教カトリックの教義とは異なる聖樹・聖石・聖泉への伝統的なブルターニュの民俗信仰croyances populairesがその姿を現しており、両者の関係は決して習合や融合ではなく默認許容と混在併存の関係にあるといべきである。また、参加者たちとその役割において特徴的なのは、ブレジドン、ファブリシャン、アソシアシオン、ファミユ、その他のボランティア、など多様かつ自由意志による奉仕的参加が主流でありながら、逆にそれこそが柔軟で強靭な参加形式となっているという点である。そして、伝統行事に作用する、維持継続の推進力、創造変更への揚力、休止廃止への引力、という三つの作用力の相互関係の上に存在しつつ、参加者たち相互の無限の内と外という2種類の関係性が入れ子細工のように連なった集団実践であると同時に、個々の参加者の数だけ意味をもつ個人的実践でもあるという形式にこそ、伝統維持を支える基本力が潜在しているといえる。